

看護職部門

看護職部門 入選

あの日のことは忘れない

【宮城県・栗野久美^{あわのくみ}】

3・11、私たちが自然の猛威に触れた日。

会議中に、経験したことのない揺れを感じ、皆で体を寄せ合った。立ってられない衝撃。地なりと揺れが永遠に続き、地球が壊れる!鳥肌が止まらなかった。余震が続く中、利用者の安否確認を開始。怖さなどではなく、夢中だった。昔、海沿いに住んでいたハルさんから「地震の後は津波が来る」と聞いていたが、そんなことは忘れていた。ラジオで津波警報を聞くまでは。

大津波到来。多くの方が犠牲になった。その中にやっさんもいた。やっさんは、独りでは歩く事ができず、介護が必要な状態だった。

津波が来る2時間前に、私はやっさんのお風呂を手伝っていた。歩くのが不自由だったため、バリカンで坊主頭に散髪したこともあり、私のことを床屋さんと呼んでいた。「今日は床屋さんがある日」。いつも、訪問を心待ちにしてくれていた。湯船の中で、村田英雄の歌をワンコーラス歌い、その大きな歌声と私の笑い声を聞いて、奥さんが浴室をのぞきに来るくらい、気持ちよくお風呂に入った。そして「来週、床屋さんしようね」と約束もした。

約束を守る事ができなかった。

最後に会ったのが私であったため、知る限りの身体の特徴や着衣の情報を提供した。涙が止まらなかった。何度も最後となったお風呂のことを思い出した。私が訪問中であれば、一緒に逃げることができたかもしれない…と何度も考えた。私も一緒に津波に遭っていたかもしれないとも。

もうすぐ、1年が経つ。あの日のことは、何年経っても、忘れることができないだろう。あのような状況で、訪問看護師として何をすべきだったのか。今後のためにも、考えていく必要があると感じられてならない。